

## 助け合いはコロナ禍から何を学んだか

### 提言

コロナ禍で生み出された多様なつながりや  
つながり方は、コロナ収束後に向けて、  
これまで以上につながり豊かな地域へと誘う。

### 登壇者

- 【進行役】 池田 昌弘氏 (特非) 全国コミュニティライフサポートセンター理事長  
【アドバイザー】 篠原 智行氏 高崎健康福祉大学保健医療学部准教授  
松岡 武司氏 倉敷市第1層SC  
森 安美氏 ゆめ伴プロジェクト in 門真実行委員会総合プロデューサー  
渡邊 公子氏 (一社) ふらっとカフェ鎌倉代表理事

#### ■ 寄せられた声から

- コロナ禍だからとできないことに目を向けていくのではなく、どのようにしたらできるか、活動が再開できるかを考えていくことが大切。
- 分かりやすく具体的な取り組みの数々にとても驚き納得し、先駆的な活躍に興味を持ってました。
- 「つながり=集う」だけではないということで、コロナがあったから新しい取り組みができた、新しいつながりが生まれた等前向きに捉えている雰囲気があり、見習いたいと思いました。

## 議事要旨 池田 昌弘氏

新型コロナウイルス感染拡大防止のため、密になるような集いの場などは自粛を余儀なくされてきましたが、実践報告では、住民同士知恵を出し合い工夫するなかで、コロナ禍であっても関係を切らない、コロナ禍だからこそつながりを豊かにする、多様な取り組みが創出されていました。それらはウィズコロナ、アフターコロナに向けた、新たな住民主体の実践に示唆を与えるものであり、分科会において共有することができました。

倉敷市社会福祉協議会（岡山県）の第1層生活支援コーディネーターの松岡武司さんは、コロナ禍において多くの通いの場が活動を自粛したなかで、会えないなかでもつながり続けるために多様な主体が一緒になって考え、「（交換日記型の）つながる回覧板」や「（マスクづくりと提供により見守る）つながり・安心を増すプロジェクト」「（ご近所での）つながり、助け合える拠点としての）互近助パントリープロジェクト」など、新たに生み出された取り組みを紹介してくださいました。

ゆめ伴プロジェクト（大阪府門真市）の総合プロデューサー（主任介護支援専門員）の森安美さんは、「認知症の人が輝ける地域社会の実現」を目指し、「こんな時こそつながりを途切れさせてはならない」と、「夢かなえマスク（づくり）」や「かどま折り鶴12万羽プロジェクト」「心でつながる文通プロジェクト」「オンライン交流会」「おそと de ラジオ体操」などに取り組み、多くの認知症の人などが参加された様子を紹介してくださいました。

一般社団法人ふらっとカフェ鎌倉（神奈川県鎌倉市）の代表理事の渡邊公子さんは、「食を通した多世代の居

場所づくり」を目指して、栄養バランスの取れた食事の提供と三世代交流の場づくりに取り組んでこられた経験を活かして、コロナ禍では、テイクアウト弁当の提供や感染防止対策をしての開催のほか、新たにフードパントリーにも取り組み、ひとり親世帯向けの食糧支援、さらには生活困窮者等に向けた行政区毎での食糧無料配布会を、市との協働事業（ガバナンスクラウドファンディング）で運営費用を確保するなど、多彩でバイタリティある活動を紹介いただきました。

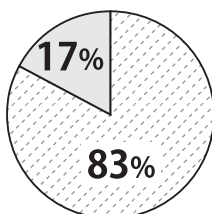
アドバイザーの高崎健康福祉大学（群馬県高崎市）の保健医療学部准教授の篠原智行さんは、民生委員の「何か持っていくものがあれば、見回りしやすい」という声から、理学療法士の視点でフレイル予防啓発のパンフレットを作成し、配付と併せてセルフチェックリストで高齢者に自身の状態を確認してもらい、同時に生活や健康状態の調査も行った結果、自粛生活により運動やコミュニケーション機会の低下が明らかになった、と紹介されました。

これら4つの実践から気づかされたのは、地域や主体は違って、コロナ禍で自粛しているだけではつながりが切れてしまう、コロナ禍でも、感染を予防し、工夫を凝らして、つながり、気にかけて合うことに果敢に取り組んでいることです。

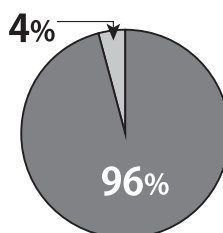
そこでこの分科会の提言は、「コロナ禍で生み出された多様なつながりやつながり方は、コロナ収束後に向けて、これまで以上につながり豊かな地域へと誘う」としました。

### アンケートの結果 参加者概数：242名（オンライン：236名、会場：6名） 回答者数：69名

回答者の所属先



助け合い活動をすすめる立場の方



その他の方

